

平成27年度 第3回生物多様性推進部会 会議録【要旨】

【開催日時】 平成28年2月1日（月） 午後2時～午後4時

【開催場所】 西宮市役所東館8階 805会議室

【出席者】 <事業者> 西宮商工会議所 常務理事 野島 比佐男 氏
<専門家> 兵庫県立大学 名誉教授 服部 保 氏
神戸女学院大学 教授 遠藤 知二 氏
関西学院大学 教授 佐山 浩 氏
西宮自然保護協会 理事 大谷 洋子 氏
NPO法人こども環境活動支援協会 理事 小川 雅由 氏
<アドバイザー> (株)里と水辺研究所 田村 和也 氏
<事務局> 産業環境局長 他14名

【主な内容】

1. 報告事項

- ・「広田山公園コバノミツバツツジ保全・再生管理計画」の進捗状況について
- ・甲山湿原自生植物の種苗育成について
- ・その他（海浜植物の状況について）

2. 検討事項

- ・「西宮浜総合公園及び御前浜公園基本計画」における海浜保全ゾーン等管理活用方法の検討について

《質疑応答》

- ・海浜植物群落の広さによる海浜全体にとって多様性の影響差というものはあるのか。（委員）
→一般的に海浜植生にとって一番良いのは海岸がほぼ全て保全できるというものである。この考えでは広いエリアで海浜植生を保全できるが、きめ細やかな維持管理が必要となり、相当の労力と費用がかかる。次ぎの案として、その半分ぐらい保全できるかなというところで、自然植生などはできるだけ面積が広い方が、いろいろな仕組みが入る可能性が高まるので、できるだけ面積は広い方が良いのだが、現在の利活用の状況を考えると、少なくとも半分ぐらいは保全したいという事もあって案を分けている。「生物多様性景観」（アドバイザー）
- ・砲台も含めた景観の保全、生物多様性の保全、植物群落の保全、海岸の利活用など、市民のニーズが多岐に渡るため、目指すべき将来像が重要となってくる。それを誰が決めるかと言うと、実際そのような保全に関わっている人達と周辺の人達が中心になると思うが、植物を守って行く上で大事な事は、海岸から陸域でどのような植物が発生しているのかがとても大事なので、そのような視点

は忘れてはいけないと思う。(委員)

→白砂青松の淡路島の慶野松原などでもそうだが、松と海浜植物と白砂の組み合わせで、そのような景観が成立している。「文化的景観」(アドバイザー)

- ・説明では生物多様性景観と文化的景観とあるが、これは海浜の植生断面模式図のイメージと考えて良いか。(委員)

→そのとおりである。(アドバイザー)

→単純に言ってしまうと、奥の方をヤブツバキクラス・トベラ群団にするか、クロマツ林にするかという話で、それより手前、海側の方は基本的にはそう変わらないと考えると、ゾーニングで斜めにしてもそんなに違いがないような気がする。(委員)

→現状は確かにそのとおりである。(アドバイザー)

- ・海側に海浜植物群落とあるのは、ここで区切られているように見えるが、実際にはもっと延びて海側にあるということか。(委員)

→実際はなるべく前面に残った方が良いと考えている。(アドバイザー)

→前面に海浜植物は残るが、現実問題は外来種によって草原化している所もあり、人の手を入れないと当然、将来予想図と現状を見ていただくとわかるが、ギョウギシバといったものばかりが生えてくるような草原の部分が残ってくると思う。(事務局)

→それはやはりゾーニング、実際にどのように復元して行くのか、放置するわけではないにしても、どれくらい自然植生を復元するために手を入れるかという話になってくると思うが、その辺は、検討してみてもどのように考えているのか。(委員)

→保全管理マニュアルはゾーニング案に基づいて近隣自治会や活動団体の意見を聞きながら将来的には作っていく事になるが、文化的景観を保全する場合のマニュアルと生物多様性景観を保全する場合のマニュアルとでは管理方法が違ってくると思うので、その辺りについては次年度以降、協議を重ねながらやっていきたいと思っている。(事務局)

- ・明治42年に陸軍が作った地図があり、その地図を見れば、防潮堤が無い段階の海岸線の植生のイメージラインが出てくると思う。今は防潮堤があるのが前提の話になっているが、元々は先ほどの写真にあった道の所に古い方の防潮堤のラインがあって、それから海岸線が江戸時代に一度後退してくる過程でラインが出てくるが、あそこで自然堤防のような形で土盛りがされていたという話がある。海岸線沿いにずっと自然堤防のようなものが出来ていて、マツがあってというような、そういう時の景観の中で人為的にマツを植えたという植生の役割を説明する事で文化的側面を説明する事ができると思う。生態系というよりも、人間と海との関係になってくるので、切り分けて考える必要があるという話もできると思う。防潮堤の前の段階での自然堤防とマツ林の役割というところを説明すれば感じ方が違うのかなと思う。(委員)

- ・将来植生予測図があるが、これを見るとわかるように、このまま人間の手を入れないと海浜植物は、

発生はするが海岸の前線にコウボウシバ群落しか出ないという構造で、残りは全て雑草群落あるいは低木群落に置き換わってしまう。だから、人間の手である程度植生をつくっていかないとどうにもならないというのがこの説明である。この説明の中で次にどうするかという時に植生断面模式図だと、クロマツが生えているか生えていないかで同じになってしまう。自然状態の場合にしても、コウボウシバの後ろの植生を維持しようと思えばきめ細かな維持管理が必要になる。維持管理にかなりの労力が必要になるということで、全面的に自然に任せて生物多様性を復元するという案が出てくると思う。実際には海岸のここしか自然の植生が出てこないの、ここまで自然の植生を復元しようとするとかかなりの労力が必要になる。放置していたら、自然環境が維持できないのであれば、放置した場合にどうなるかという話が必要になる。放置した場合には海浜植物は前線の部分にしか残らないが、ここを自然のかたちに復元しようとする、きめ細やかな維持管理が必要となる。文化的景観で考えてみても、全て砂浜にしようと考えて除草しようとしても膨大な労力が必要で、さらにクロマツ林の中を除草しようとする、とすごく大変であり、どちらの考えにたっても大変である。(委員)

- ・この間も御前浜に行ってみて、浜が削り取られて段差がきつくなっている事が気になった。甲子園浜もそうだが、埋立地ができて潮の流れで押し引いて生じた滑らかな傾斜ではなく、断崖のように削られるような取られ方をしており、海浜の植物群落がある所が削られていくという状況がこれからは続くのかなという気がする。波の事は詳しく分からないが、見ている限りでは、段差がどんどんついてきているように思う。いわゆる、埋立地がない段階で自然に波が押し引いたりする中での植生の一本の部分と、埋立地が出来てしまって潮の流れや海流が横から入ってきて抜けて行くような段階になった時に将来的に砂浜はどのように変化するのかなというのが気になっている。(委員)

→もっと削られると思う。御前浜の奥の方では1 m以上は削られている。(委員)

→その件についてはもう養浜も含めて考えないといけない。植生図を描いてみても台風が来たらどうになるかわからない。(委員)

- ・コウボウシバ群落といっても、半分以上は雑草が入っているが、コウボウシバを維持するためには雑草を抜かないといけない。だから、海浜植物群落を維持して行くためには何かしないといけない。(委員)

→海浜植物群落を保全すると言っても全面的に保全しようとするものすごい労力が必要になるのでどれを選ぶかと言う話になってくると思う。雑草抜きにはかなり苦勞すると思う。(委員)

- ・クロマツの存在は歴史的に人間が、自分たちの暮らしを守るために段階的に導入してきたものであり人と海との関わり合いの文化として尊重する。そういった意味では、夙川の縦の筋のクロマツも同じだと思うので、その辺も繋げて、海沿いの所との分け合いを上手くできたら良いと思う。(委員)
- ・現在の御前浜はマツが生えている間の部分には草が無い。南側は全く草が無い状況で、砲台の前の

部分でも2箇所以外には草が無い。(委員)

→コウボウシバしかないというのは異常な状態である。本来ならもっと色々な植物が入ってこないといけない。今の段階では現実的な案でどうかというものを提案した方が良い。(委員)

- どの方針にしても、夙川河口の隣接する部分というのは、一般市民が集まって遊んでいる場所だから、方針を出した時に夙川河口の横のスペースに、段階的に制限をかけるのかどうかも含めて考えないといけない。文化的な砲台の所は、どちらかと言えば、バーベキュー等をする人が集まるが、少し散歩に来てという人たちは河口域のあたりに集まる。一般市民が最もよく集う場所とすれば河口の横になる。保全という方針で段階的にきちんと守るというのが必要であれば、活動制限を加えるという考え方も出てくるし必要になると思う。(委員)

→地域の方々に説明する際には、現地の計画平面図に園路や細かいマツの植栽や実際の利活用の方の動きを反映させながら、ここはこんな意図に基づき海岸に戻していくという説明が必要になってくると思うので、そのような動きを睨んだ啓発の仕方や立入制限なども含めて、全体的にこの公園がどのような将来の方向に向かって進んでいるかということを表示できればと考えている。今は景観という視点から文化的景観と生物多様性景観という切り口で、海岸を将来的にどのようなように維持するか、今回の整備工事は2年、3年で一旦終わる話だが、維持管理という面では、終わりが無い。行政の力だけでなく、市民の参画と協働により維持管理を進めたい。市民の方に押し付けるのではなく、様々な意見を聞いた上で積み上げて行くという点を経ていきたいと考えている。管理者が県から西宮市になるので、それを見込んだ上での維持管理の組み立ても必要になってくると考えている。(事務局)

- 文化的景観という表現は人文的、生活の関わりがあるようなイメージで、あまりにも文化的というイメージでは捉えすぎかなという気がする。砲台も含めて文化的というのが普通に認知されていると言えばそれまでだが、言葉の使い方としてももう少し、親しみがあるとか、分かりやすく表現しても良いと思う。(委員)

→文化というのは人と海との関わりの中で、景観として生じてきたという事を滑らかな言葉で市民向けの勉強会では用意していきたいと考えている。(事務局)

→富士山が文化遺産になったとき、三保松原が入った。三保松原が文化的景観、文化遺産というのはまさしくその通りであり、里山などと同様に、松原というのは自然景観ではないということから文化という言葉を使ったのだと思う。文化的景観よりもむしろ生物多様性景観という表現の方が分かりやすく、自然景観ということで、自然景観に対する人為的な景観という事になる。(委員)

- 御前浜の現状から、資料の海浜植生断面模式図のようにどの辺りまで奥行きが取れるかなという疑問がある。(委員)

→御前浜の現状では、ウバメガシまでは厳しく、ハマゴウまでだと考えている。(アドバイザー)

→どの案にしてもそうなるのか。奥行き的にはハマゴウまでか。ハマゴウクラスもかなり幅が狭く

- なってしまうのか。ハマゴウまで本当に戻そうと思うとどれくらいの面積が必要なのか。(委員)
- まだそのような細かい所までには至っていないが、先ほどの話にもあった計画図と照らし合わせて実際の距離などを見ながら、管理できる作業量もあるため、どの程度まで可能なのか具体化したいと思う。(アドバイザー)
- 資料の海浜植生断面模式図は自然海岸における植生の配分の問題で、全てここ御前浜に対応するものではない。御前浜であればハマゴウまでは無理だと思うし、ハマボウフウクラスぐらいが限界でクロマツの前線に植物が生えているような計画にはならない。海岸の植生を見たときに、自然海岸でも種子島のように照葉樹林がキレイに残っている所は自然状態の海浜の植生断面模式図のタイプになるが、普通は照葉樹林が伐採されて、全部クロマツに置き換わってきていて、その前面の海岸線に自然が残されているという場合はクロマツ林のみられる海浜の植生断面模式図のタイプになるという事である。西宮の場合は、生物多様性景観ではハマボウフウクラス、文化的景観ではクロマツを主体にして前線にあまり植物が入らないようなパターンという計画になっている。図の描き方について、クロマツを内陸側に向けて傾けて描いて、ヤブツバキクラスのトベラ群落は、もう少し内陸に入ってくると背が高くなるので、高さが防風林になるように描き、もっと詰まったようにして欲しい。(委員)
- ・当部会としてゾーニング案を示し、結論付けておいた方が良いのか、それとも2つのエリアに分けるような所でだいたいこれで進めますという事で良いのか。(委員)
- 委員の皆様の意見だと、あまり明確に線を引いてゾーニングするのめどうかという事だったので、文化的景観と生物多様性景観など海浜の景観を近隣自治会や活動団体へ説明し、その上で意見をお聞きしながら、今後ゾーニングを作成していくということで、委員の皆様に了承いただき、進めていってよろしいか。(事務局)
- では、明確な線引きは行わずに、名称の問題があるにしても2つのゾーンに分けるという事として、細かくは別に、これぐらいの考えで行きたいという事であるがよろしいか。(部会長)
- イメージが今一つどのようなものになるのか分からないが、市民の皆さんにも生物多様性、自然景観が大事だということを理解してもらおう事が大切と思う。(委員)
- マツを上手く配置するという話の中に、先ほどの歴史的な時間軸を説明し、今は防潮堤だが、昔はマツや自然物で自分たちの暮らしを守ってきたという意味づけを付与しつつ、大阪湾域の貴重な砂浜であるから、それがどうあればよいかという提案は出しても良いと思う。歴史的に変遷してきた事と今の時代に求められる事、両方を検証した上で、西宮市は生物多様性にしのみや戦略を策定しており、戦略に基づき残せるものは最大限残していきたいという立場は伝えておくべきだと思う。(委員)
- ・現存植生図、過去の植生図、人の手を入れずに放置した時にどのような状態になるのかという図、自然の海浜の場合には、どういう植生配置になるのか、クロマツ林は人為的に作られる景観である

という事も含めて、基礎的な資料は揃ったと思う。後はこの二つの考え方を盛り込みながら市民の意見をお伺いし、検討を進めるという事でほぼ一致したと思うので、細かい線の部分についてこれから検討するという事でよいのではないか。(委員)

- ・旧西宮砲台というのが、道路の防潮壁の外側にあり、御前浜の砲台と元々は一帯のものだったと思うが、それはどのように整理するのか。(委員)

→今回の公園整備とは別に、文化財課が史跡保存管理計画を作成している。その計画では史跡指定の範囲内のことを包括して検討しており、その計画の今後の流れの支障とならない範囲での公園整備となる。(事務局)

(次年度の勉強会スケジュールについて)

- ・今後、7月頃を目処に、近隣自治会や活動団体へご意見を頂く予定。
- ・意見交換会開催前に部会を開催する予定。(事務局)